

日本語教材 入門～上級

会話 日本事情 文法 漢字 読解 レポート 日本語能力試験対策など
一般成人 留学生 研修生 ビジネスパーソンなどを対象

コラム

空の青さを体感する教室 —活動型クラスの実践への期待—

早稲田大学
細川英雄

あなたは活動型のクラスをやってみたいと思ったことはありませんか。
今からもう10年ほど前のことです。わたしにとって日本語のクラスといえば、まず教科書ありき、でした。当時、すでに10年近いキャリアがあったため、どんなテキストでも使える自信がありました。テキストを選ぶときは、毎年どのテキストを使うかを考え、ちょっと満足できないけれど、まあ仕方がないからこれにしようか、という感じで使っていました。新しいテキストを職場の仲間と一緒につくったこともありましたが、一度つくってしまうと、その後は使いにくくなり、なかなか定番になりませんでした。
たまたま新しいカリキュラム改定にめぐり合い、週に一度、上級のクラスを担当することになりました。そこで、この機会に、一度、教科書を離れてみようと思ったのです。

学生たちとのディスカッション

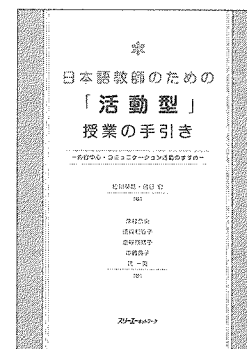
話題は、学生たちに決めてもらおう。これがまず第一の出発点でした。
当時の教室は、古い建物の屋上にある暗いプレハブでしたから、集まった学生たちと、まず屋内の庭園に行くことを提案しました。ちょうど周辺の木々や芝生の緑が目にしみるような、とても天気の良い日でした。
学生たちの自己紹介が一通り終わると、今度はテーマの選択です。話題は、日常生活の苦労から日本人の気質、そして社会問題へと発展していきます。教科書を使っていたときは、こういう時間はどこか居心地の悪いものでした。「テキストを読まなければ」、「シラバスに沿って計画通りに進めなければ」、こんな罪悪感がいつも付きまわっていました。
しかし、それぞれの話題について語りあう学生たちの自由なやり取りを聞いているうちに、学生たちのこの生き生きとした姿はなんだろうかと不思議な感覚に襲われました。今までは、テキストを効率よく教えるべきだと考えつつ、それでも何か心に引っかかるものがあって、それに邁進できない自分がいました。
ふと振り仰ぐと、真っ青な空です。「こんなに青い空は、はじめてだ」
わたしは思わず知らず大きな深呼吸をしていました。このとき、ことばのクラスで一番大切なのは、決められたことを決められたとおりに実行することではなく、学習者自身のやる気をどうやって引き出すかであるということに気づいたのでした。

活動型クラスのはじまり

こうした学生たちのディスカッションからはじまった、この学期では、当時マスコミで話題になっていた君が代・日の丸問題を扱うことになりました。この実践の試みは、新聞等でも紹介され、かなり注目された活動でしたが、わたしとしては反省するところも多々ありました。たとえば、選択した社会問題に賛同しない学生も数人いました。ひとつの問題を選ぶとすると、必ずそれに反発する人が出ます。「学習者ニーズ」と世に言いますが、彼ら一人ひとりの要望に応えることは事実上、不可能です。しかし、教室を動かそうとするかぎり、どこかで折り合いをつけなければなりません。わたしはその折り合いをどこかで強引につけてしまったという反省がありました。もっと自由に、もっとのびのびと、これがわたしの日本語教室観となったのです。
空の青を体感した、あの日を契機に、わたしは教科書を捨て、活動型教室をめざしてエンジンを始動させます。そして、数学期の実践の後、少しずつ初級に近づくことを試みはじめました。なぜなら、この活動型のクラスは、初級に近づくほど、担当者の負荷が増します。学習者への細心の配慮とそのためのかなり高度なテクニックが要求されるからです。それでも、ほぼ10年かけてようやくわたしはゼロ・ピギナーのいるクラスにたどり着きました。

自分を内省させる活動型教室

この『「活動型」授業の手引き—内容中心・コミュニケーション活動』は、現在の職場で実際にクラスを担当するメンバーとの協働の中でつくられたものです。孤軍奮闘であった10年前に比べると、格段に仲間も増え、今は気負いもなく肩の力も自然に抜けました。
この間、活動型日本語教育のマニュアルを書いてほしいという要望はいろいろなところからありました。けれども、わたしは活動型のマニュアルを書くことはできませんでした。なぜなら、たとえマニュアルを書いたとしても、それは教師の不安や迷いをすべて解消する魔法の杖にはなり得ないからです。むしろ、マニュアルは、学習者の自律を阻み、教師の成長を妨げます。それに対して、今回の本は、実際のクラス活動に寄り添いながら、活動型授業とは何かを学習者と一緒に考えていくものです。この本は、今までの自分を振り返らせ、これからの仕事への活力を生むきっかけになるものでしょう。
今から思えば、「今のわたしはこれでいいのだろうか」と悩み続けた自分を内省させるきっかけになったのは、紛れもなく活動型教室だったことに気づくのです。



日本語教師のための「活動型」授業の手引き
—内容中心・コミュニケーション 活動のすすめ—
(→P91)